〔中国の陶磁展によせて〕

龍泉窯の青磁について

龍泉窯はかつては中国最大の青磁窯で、浙江省の龍泉県を中心に境界を接する慶元・遂昌・雲和などの県にもおよんで、二百余を数える窯跡を今日に残しています。その中心的窯場は龍泉県の琉華山の麓の、通称琉田の大窯や金村の両地で、窯址の数が最も多く、質も最もすぐれています。この地に青磁窯が起こったのは五代の頃で龍泉窯に先行する中国の代表的な青磁窯である越州窯が呉越王銭氏の庇護を失って急速に衰退したのち、その伝統を引継いで興起したものと考えられています。龍泉大窯から出土した五代期の陶片は彫文・釉調ともに越州窯のそれと大変よく似ているからです。

そもそも中国の青磁焼成の歴史は非常に長く、浙江省地区における青磁焼成の遺跡は春秋・戦国時代に遡ることが出来、原始青磁から龍泉青磁まで実に約2000年の才月を経ています。3・4世紀頃には東部の寧紹地域の紹興・上虞を中心に、初期青磁が焼かれていました。その後、五代・北宋初期には余姚を中心に、いわゆる秘色青磁という、より完成度の高い青磁が焼かれるまでに技術が進歩しました。同じ頃青磁を焼いた窯は、越州窯のほかに婺州窯と甌窯がありますが、甌窯の青磁を当時の人々は“縹瓷”（縹は、はなだ色・浅青色の意）と形容し、越州窯の釉質を“玉の如く、氷に似たり”と称し、釉色を“千峰翠色”、“秘色”などと表現しました。

北宋時代の龍泉窯は以上の三つの窯の影響を受けており、製品もその三窯のそれとよく似た特徴を示していますが、青磁の釉色と質感の美の頂点をなすのは、やはり宋代の陶工が創造した龍泉青磁であると言われています。それは天工を巧みに奪った人工の青玉であると称されるほどでした。この俗に砧青磁といわれている、翠色の厚い釉の青磁が生まれるのは、北宋時代も末近い頃だったのではないかと考えられています。そして南宋時代中期以後、ついに梅子青、あるいは粉青などと呼ばれる龍泉窯独自の釉や意匠・器形までも越州窯青磁の系譜とは異なる新様式の青磁を完成させるのです。いわゆる砧青磁の誕生です。

南宋時代後期には龍泉窯は大発展をとげ、莫大な数量の青磁を生産し、東アジア・東アフリカ・アラビア諸国などへ輸出し、海外に広くその名を知られるようになりました。我国にも鎌倉時代末の14世紀初めには大量の砧青磁が輸入されており、高い評価を得ていました。南宋後期が龍泉窯の最盛期であったことは、大窯付近の窯址が北宋時代の23カ所から南宋時代にはその倍の48カ所に増えていることからも判るようです。龍泉窯がこのように発展した理由は県域内に製陶原料が豊富に埋蔵されているばかりでなく、山地や丘陵地も製陶に欠かすことの出来ない燃料の松薪を多く産したことです。さらに窯の多くは渓流付近の山腹に築かれ、製陶原料の加工は水車によるつき臼を大いに活用し、製品の運搬も多くの河川を水運に利用出来るなど、製陶地の条件に大変恵まれていたことに依ります。

龍泉窯の陶石は大量の石英と多少のカオリン石・絹雲母などの鉱物を含んでいて、灰白色を呈し、露胎の部分は胎土に含まれる鉄分が焼成で酸化し、赤い焦げ色を見せるのが普通です。鉄分の含有量は青磁の胎と釉の色調を決める大事な要素の一つです。例えば、いわゆる“朱砂底”や“紫口鉄足”はいずれも胎内に含まれている2～5％ほどの鉄分が焼成の後半に二次酸化を受けて生じる状態です。

釉薬は木の葉を焼いてつくった石灰ソーダ釉で、それを何遍も重ねてかけるため、釉層が厚くなり、従って深い美しい色沢が得られます。石灰ソーダ釉の特徴は高温にたいする粘性度が比較的高いため釉が流れにくく、釉層をより厚くすることが出来るのです。釉は焼成の間に胎土や釉自身から多くのガスを噴き出し、その細かな気泡が浮遊した状態で焼き上がっていることが多いのです。これが砧青磁の秘密の一つで、散りつもった気泡は釉色に霧のようなほの白さを与える役割を果たすのです。砧青磁の釉色をよく粉青色と形容しますが、この粉というのは気泡の細かな白さのことを言ったものです。この細かな気泡とともに還元して青味がかった灰色の胎土が、砧青磁の釉色に一層の深みを与える効果を上げているのです。いわば透明な青磁の色をひき立たせる背景の役割を発揮させています。

顕微鏡で見ると、粉青色の釉層に大量の小気泡と溶けていない石英の粒が含まれているのが見えます。それらが釉層に進入した光線を強烈に乱反射させ、それによって釉膚に普通の透明なガラス釉とはまったく異なった趣きの美的効果を生み出しているのです。龍泉窯で南宋時代に誕生したこの石灰ソーダ釉が、青磁に偉大な進歩をもたらした訳です。

元時代の龍泉窯は大型の器物を焼成する技術が極立っていましたが、釉は青というより黄緑色のいわゆる天竜寺青磁となります。過度の大量生産で製作が乱れ、良質の原料が不足してきたためです。さらに明時代の中期以後、その製陶活動は次第に衰えていきました。北京・故宮博物院には清代の康熙51年（1712）の銘をもつ龍泉窯の資料があり、これを龍泉窯の下限資料と見做すことが出来るようです。こうして龍泉窯はその7～800年もの長きにわたる青磁窯の歴史的役割を終えるのです。

（吉田宏志）

青磁多嘴壺　北宋・元豊3年（1080）銘

青磁碗　南宋時代

青磁鯱耳瓶　南宋時代

青磁貼花雲竜文四耳壺　元時代

季刊 美のたより No.117
平成８年 11 月 14 日
発行　大和文華館

Copyright ©2007 The Museum Yamatobunkakan. All Rights Reserved.